

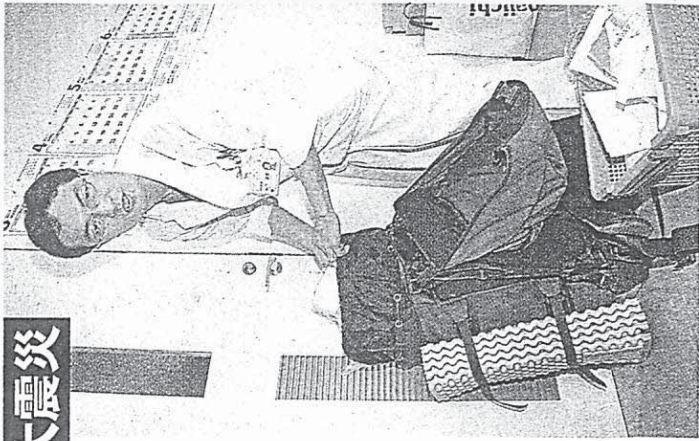
# 医療従事者

# 被災地へ

## 命と健康を守る 使命今こそ

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。今も多くの被災者が避難所生活を送る中、医療従事者による支援活動が本格化している。道の要請に基づく医療支援チームの派遣に加え、各医療機関が独自に現地支援を展開中だ。多くの人々の命や健康を守るため、圏域の関係者の動きは今週も活発だ。

苫小牧民報  
2011.3.28付



大きなりユニックサククに乘な  
どを話める松下医師

### 東日本大震災

## 「心の負担軽減を」

### 勤医協の松下直彦医師 あす出発

勤医協苫小牧病院は29日、東日本大震災の被災地となった岩手県大船渡市の避難所へ、内科医の松下直彦医師（37）を派遣する。松下医師は「被災地には生活基盤を失って混乱している住民が多い。診療活動を通じて、人々の心の負担も軽減できれば」と話している。

北海道民医連が派遣する支援チームの第4陣16人の一員として被災地へ入る。29日に新千歳空港をたち、岩手県花巻空港に到着後、大船渡市の避難所で避難住民の診察を1週間の予定で行う。被災地の医療状況に関する情報も収集し、次の第5陣につなげる。

道民医連は、震災翌日の12日から宮城県塩釜市の坂総合病院で救援活動を開始。これまでに38人の医師や看護師を派遣し

ている。松下医師は、被災地の惨状をテレビなどで見て、「医師として困っている人を助けたい」との思いから第4陣のメンバーに志願した。出発の前に薬や医療器具の準備などに追われていた松下医師は、「医師が倒れたら周囲に迷惑が掛かるので、自分の体調管理に気を配りながらやれることをやりたい」と決意を込めて、被災地へ向かう。

## 岩手県で支援活動

### 千歳市民病院の看護師2人

市立千歳市民病院の看護師2人が25日、巨大地震と津波で被災した岩手県に派遣され、現地の医療機関で支援活動を続けている。

派遣されたのは玉井留理子さん（43）と白木洋美さん（40）。2人は道看護協会の災害支援チームに登録しており、同協会からの支援要請を受けて派遣が決まった。

市立千歳市民病院によ

る。2人は、地震や津波で甚大な被害を受けた同県山田町に入り、被災者支援の医療活動を現地の県立病院で行っているという。29日まで活動を続ける予定だ。

被災地へ向かう前に市立千歳市民病院で25日行われた出発式で、玉井さんは「一人でも多くの方に安心と安らぎを感じてもらえるよう、心の通い合う看護を目指し、力を発揮していきたい」と決意を述べた。

共に1歳の母で、心配する家族を残しての支援活動。白木さんは「一家族も同様も応援してくれている。被災した方々のた

を話した。式に出席した山口市長は「市民の大きな期待を受けての任務。活躍をから願っている。自身健康に十分留意して頑張ってきてほしい」と激励した。

道が救援物資の受け付け開始  
個人対象

道は、東日本大震災被災した人々を支援するため、個人からの救援物資の受け付けを28日に開始した。

直接持ち込む場合の受付場所は、道内の各総合振興局と振興局。期間は28日から4月22日まで。土曜日や祝日は除く。時間は午前9時から午後5時。

郵送の場合は、郵便番号003-0030 札幌市白石区流通センター2丁目2-1 日本通運札幌団地倉庫A-10 救援物資センター。送料は送り主の負担となる。

受付物資は、被災地から要望のある食料品、生活用品、体育用品、いずれも新品に限る。

食料品は①インスタントラーメン（1箱単位）②カップ麺（同）③缶詰（同）④粉ミルク（1缶単位）で、いずれも賞味期限が3カ月以上ある物。生活用品は①トイレットペーパー（1包が12個または18個単位）②箱ティッシュペーパー（1包が5個単位）③生理用品（1包が10枚単位）④子供用、大人用の紙おむつ（1包が10単位）

学用品は①ノート（1

## 1日に気仙沼市へ

### 市立病院災害医療チーム6人

東日本大震災に伴う被災地の医療支援で、苫小

気仙沼の避難所で6日まで医療支援を行った後、